



障害をもつ幼児の保育(17)

—この子と出会ったとき—

津守

真 (M)

津守

房江 (F)

ちよつと立ち止まって

今、この話をしているのは夏休みも終わりに近いころですが、夏には私たちは二人で各地に出掛けているいろいろな人と出会いました。話は自ずと保育のことになりましたが、ここらでちよつと立ち止まって、心に残っていることを話しましょう。

子どもの思いはそのときには分からないことが多い

F 私の心に残っているのはS養護学校での研究会のことです。個人的なことですがここには私たちと親しいS先生が働いておられます。以前、上京して、愛育養護学校で勉強しておられたとき、そのご一家と親し

くなりました。一緒にクリスマスのキャンドルサービスに行ったことも忘れられないことです。

M そう、S先生は十五年前内地留学で、東京の愛育養護学校に長野から一家で来られました。二人のお子さんE君(五歳)とK子さん(三歳)は愛育養護学校の家庭指導グループの保育の中に一緒にはいつてましたね。両親と一緒にはいえ、知らない都会で生活し、知らない子どもたちの中に入って過ごす大変さを、今も覚えています。

F 両親によってお子さんたちはしっかり支えられていたのでしょう。初めのころは子どもたちにとっては大変な状況だったでしょうが、それを乗り越えるような行動が、遊びや言葉の中に見られましたね。K子さんがシャワー室でシャワーを指して、「これ、うちにもあるよ」と言ってから、「汽車に乗っていくおうちじゃなくて、Oさんのうちのそばの……」と私に話してくれたのは、来てから何カ月もたったころでした。

東京で借りているOさんの家と長野の家と二つのおうちがK子さんの中でしっかりと捉えられて来たことが分かりました。子どもって自分の居場所を確認するのにこんなに時間がかかるのだといじらしくなりました。大変な状況の中でもちゃんと成長していくのですね。

M 今回、高校生になったK子さんが、一夜、自分が焼いたチーズケーキをホテルに差し入れてくれました。とてもおいしかったね(笑い)。あのときには、こんな立派な若者になるなんて考えもしなくて、目の前の幼い子どもが何とか日々快適に生活するようにということしか考えていなかったのに。

変化のときは危機をはらんでいる

M そのことは研究会で症例として報告されていた子どもについても同じようなことがありましたね。保育園から小学校に入学したばかりの子が、今まで保育園で見せていたお行儀のよい姿とはまったく違った面を

見せるようになったというのがあったけれど、それは我が儘になったのではなく、自分の考えを表現し始めたのだというように、養護学校の先生方が成長と捉えて「すごいすごい」と言っておられたのは大事なことだと思いました。

F 人生には理不尽なこともあるから、それを覚えるために自分の思うようにならないことも我慢させるのがいいという意見もあるけれど、それはどう考えたらいいのかしら。

私には子どもがやっといま『自分』に気が付き始める自分の考えを主張し始めたのを、大事にしたいという担任の意見に賛成でしたが……。

M その発表の中にあつたことで、その子がお気に入り自転車に乗りたいけれど、ほかの子が乗って行ってしまったとき、ものすごく泣いて怒る事が何度もあった。その先生がみんなの行ってしまったあとでお気に入りの自転車を探してきたら泣き止んで「ありが



とう」と言ったという。我慢することを学ぶより愛すること、愛されること、を学ぶのが基本だと思う。こういうことは子どもの傍らにいるとき、毎日起こることだけれどいろんな人がかかわっているときには、迷ったり人の見ていないところでこっそり子どもの願いをかなえてやろう、と考えたりするのも大人の現実かもしれない。

F それから入学したばかりの生徒が、裸になって困ると言うことも報告されていました。入学式のその日にパニックになって裸になった。

M 裸になる子どもはいつでもいますね。何人ものそ

ういう子どもに接して、子どもよりも大人の方が人の目を気にしてることが多いですね。子どもは服も何もかもかなぐり捨てて、何かに没頭出来るようになるのは、学校が自分の場になったことの証拠ですね。学校では裸でもいいけれど外では服を着てくれるようにお願いしてそうなるときもあります。でも、必ず変化のときはくる。子どもが大人を変えていく。

F そうそう、それによって子どももまた変わる。子どもは状況が変わるときに、不安と危機感を持つでしょう。それに大人が気が付いて心に向けてるとき危機ではなく成長のときになるといいのかしら。

教育には目標が必要でしょうか

F よく聞かれることに、子どもを受容することと、少々無理しても子どもにつけたい力の目標とその兼ね合いを、どのように考えていったらいいかということがありますね。障害児といわれる子どもたちの教育で

はそれが強いように思います。

M そうね。たびたび聞かれるけれど、ひとりひとり違いがあるから学校で決めた目標では無理がある。その子のもっているいいところを、どうやって膨らませていけるか、と考えるのでしょうか。

F そうなるとカリキュラムについての考え方も違ってきますね。未来についての設定ではなく、この子の歩んだ道を検証してみる、そしてその先は子ども自身が開いていくようにおとなが協力するのが、実際に私たちがやっていることではないかと思うのです。

私は保育に入るときもずっと面白くしてあげようと思ってしまうのですが、そんな私の気持ちを抑えて子どもが先に立つていくようにと考えるまで、随分時間がかかりました。もちろん子どもが自分から興味を持つようなものを用意したり、環境を整えたりは大事なことです……。

おとなは子どもが長い人生を

全うしていけるように協力すること

M 学校教育という枠を外して考えると、教育に目標が必要だという考えは絶対ではないですね。私が立ち戻って考えるのは「この子の長い人生を全うしていけるように、自分はどうやって協力していけるのか」という視点にたって考えます。

F それは、本当に大事な視点ですね。障害のある子どもだけでなく、どの子どもにとっても共通したことですね。

いま、『生きる力』ということがよくいわれますけれど、本当にその中身を考えてとさまざまです。ある人は経済的な能力を考えるし、ある人は他人に迷惑をかけないようにと考える、いい学校に入るのがそのために必要と考える人もいます。でも、いま言われたようにその子が自分の人生を全うできるように協力する、

と考えることはもつと深いところまで含んでいて、同感出来ます。

M 私は『長い人生』といったけれど養護学校に携わっていると、かならずしも『長い』とはいえない出来事に出会うこともあります。子どもの死に出会ったとき「ああ、きのう、これだけのことをやっておいで良かった」と思う。子どもが「どうしても」ということをやっておくことは、子どもにとつても自分にとつても大切だと思う。

胸の痛む事も思い出しますし、時には悔いもありますが、子どもからもらった元気と変革する力をもってまた新しくやっていきましょう。